2 第二言語習得の分野の研究からのコミュニケーション能力

第二言語習得の分野、つまり英語を第二言語として教える研究は、移民大国であるアメリカやイギリスで古くから研究されてきました。社会言語学者であるDell Hymes (1970)は、コミュニケーション能力を次のように定義しています。

> 「コミュニケーション能力とはある特定の文脈において、互いにメッセージを理解したり、意味を話し合うことを可能にする能力である。その能力は、言語についての知識と言語の社会的・機能的働きの両方を身に付けることによって得ることができる」

Canale and Swain (1980)は、コミュニケーション能力を次の4つの能力に分けています。

> ① grammatical competence (文法能力)
>
> ② discourse competence (談話能力)
>
> ③ sociolinguistic competence (社会言語的能力)
>
> ④ strategic competence (方略的能力)

①の文法能力とは、言語の構造・語彙・発音に関する知識を指します。②の談話能力とは、場面や状況を的確に把握し、伝えられる能力を言います。たとえば、Do you have a watch? は、相手に時間を聞きたくて質問しているのか、本当に時計を持っているかどうかを知りたくて聞いているのかは状況によって違ってきます。③の社会言語的能力とは、言語が話されている社会的、文化的な状況を考慮した上で、自分の言いたいことを相手に伝えたり、相手のことを理解できる能力のことです。たとえば、相手と別れる時に、Let's get together again soon.をGood-bye.の意味で解釈できるのもこの能力です。④の方略的能力とは、コミュニケーションをスムーズに進めるために必要な能力です。相手の話の内容がよく理解できない時、Pardon me? Could you repeat that again? などと問いかけるような表現方法を実際のコミュニケーションの場で適切に使える能力を言います。

その後1990年にBachmanがCanale and Swainの定義を改訂しました。Bachmanはコミュニケーション能力をまずorganizational competence(構成能力・編成能力)とpragmatic competence(語用論的能力)に分類しました。organizational competence(構成能力・編成能力)は、さらにgrammatical competence(文法能力)とtextual competence(テキスト能力(まとまりのある文を作る能力))に分かれます。pragmatic competence(語用論的能力)は文脈の中で社会的・文化的ルールに従って適切に言語を使用する能力で、さらにillocutionary competence(発話内能力)とsociolinguistic competence(社会言語的能力)に分類されます。illocutionary

competence（発話内能力）は、「さまざまな行為（依頼、約束、謝罪など）を、言語を通して適切に遂行する能力」で、次の4つの機能に分類されます。

① ideational functions（観念的機能）：考えや感情を持ち、それらを表現する機能

② manipulative functions（操作的機能）：物事を処理し、何かを達成する機能

③ heuristic functions（発見的機能）：問題の解決法を発見していく機能

④ imaginative functions（構想的機能）：何かを構想し、創造していく機能

（白畑知彦ほか『英語教育用語辞典』大修館書店 より抜粋）

日本の英語教育の現状に詳しいJ.V.ネウストプニー氏は、第二言語習得の分野からのコミュニケーション能力の定義をふまえた上でコミュニケーション能力を、発音・語彙を含む文法能力と、それ以外の能力に分け、後者の立場を強調するべきだと述べています。コミュニケーション活動には両者ともにもちろん必要不可欠ですが、あまりにも前者に偏重した教育がなされてきたために、後者の必要性が、今、叫ばれているのです。

本書では、コミュニケーション能力の中で、発音・語彙を含む文法能力を高める目標を「言語目標（linguistic focus）」とし、それ以外の能力を「コミュニケーション能力育成目標（communicative focus）」と位置付けています。